繪本
敵討
岩見英雄錄
三編
六

遠
2509
35-20

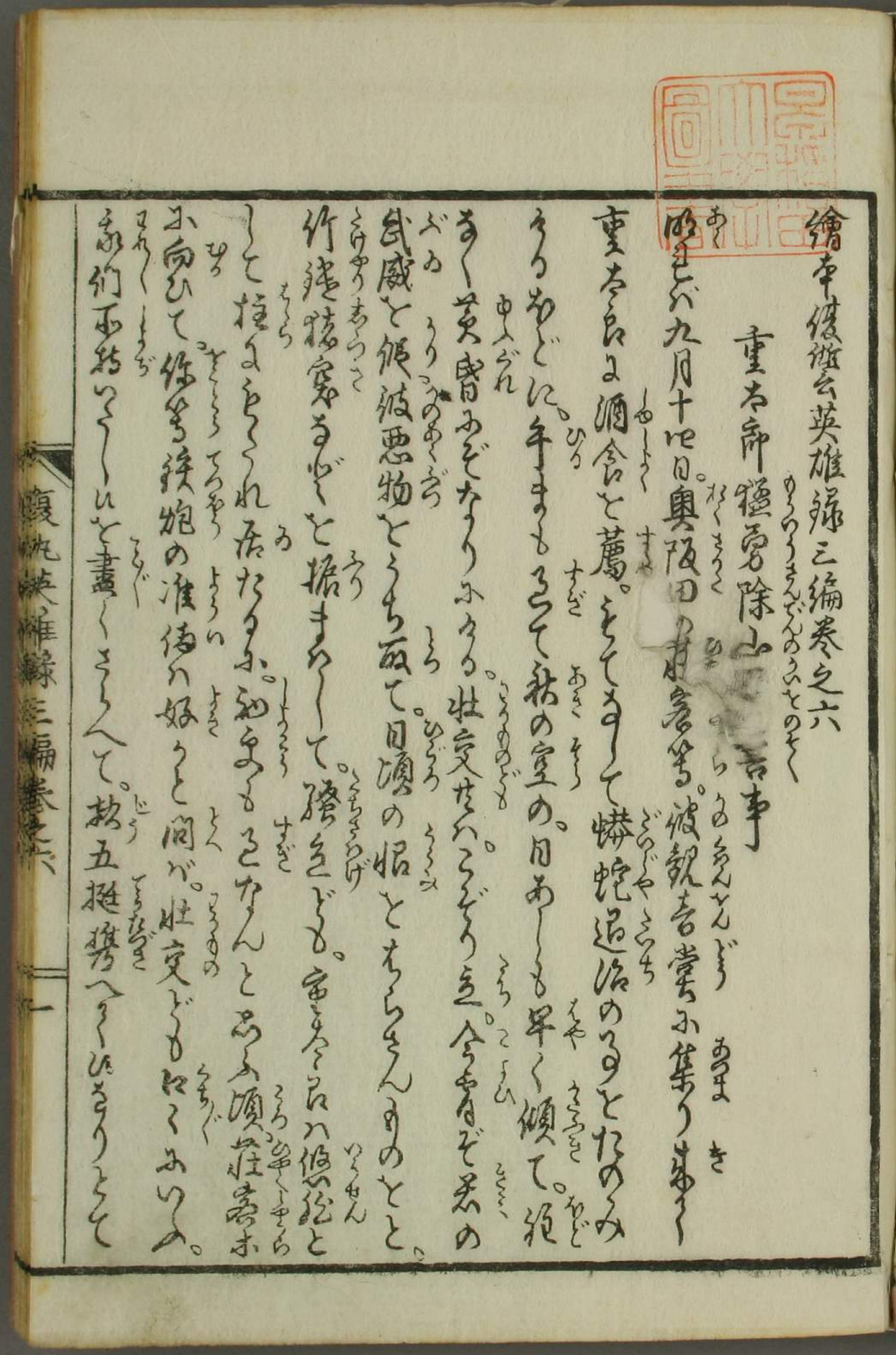
遠
2509
35-20

宝玉山人

繪本復讐英雄録三編巻之六

重右衛門猛勇除山賊事

時に文政九月十四日。奥陸の者共。彼観音堂に集り居て。重右衛門を酒盛と薦。そもそも蟒蛇退治のうもとなるのみうるおぼえに。年まもなくして。我の室の。日あしも早く傾て。狐狸共おそなりふるる。壮夫共。こぞり立。今宵ぞ来の武威と。彼悪物とうち取て。日頃の恨とちらさんものとと。竹槍鉄砲をもぐと据まらして。強弓ども。宮えぞ引ハ。偽と。ちらして。拵よもくれ在たるふ。初よりもるとかんとふふ頃。荘者ホ小向ひて。鉄砲の准備ハ好うと問バ。壮夫ども。ハくふいつ。



掾側にかゝるべく立かゝれバ。重太郎打笑ひて否。縦までも入じ。五挺
みてあるべしとて自是を切られたる。晝頃と仕込置、其手
切火縄に而大筒一挺を引提。其所刻よしがあ立べしとて掾
より飛下と見やれバ。毛頭そこにて八人の肚案せんまでで
身をそれバ此外人ハ鉄炮を打かけ。後に備てぞ出たる跡
みハ村老ども猶のや豈ふあつまりて。大悲の御名を唱つゝ
蚖蛇及蝮蠍氣毒煙火然念彼観音力尋聲自回去と
ぞ唱ける。斯て重太郎等ハ。締とかり渓を跡。後岩を履で行
おどれ鬱蒼たる樹林にわけ入る事二百歩ばかりにして一面の芽
原に出たり。荘客等の曰。此よりふかくハ。まちまちへて好る
べしと致すぞ。重太郎うなづきて。繁茂る樹の根に繞りけ。熟地理

ところに。右は渓谷と見ゆ。左の方ハ平地十間あまりありて。
叉巌そびへ。松杉鬱茂りたる高岳に接ぐなり。重太郎荘客に
むかひて。彼蛇出るハ大抵何方の辺から。手を間ぺバ一ツ斉に答て
曰従来彼を呼ひ出すハ。此ところなりとて一同に聲を發ひ揚され
バ。彼奴も人ありと知りてや。忽ち風を起。ものすごく吹来り。時に
出現んぜよ。向ふ方に構えて。来るべき松が枝。其傍なる巌の上より。
頭を顕しけるに。其時の遅しと重太郎は此谷川で。むらやみに縁り。筋違に逃んへば。
来防の樹林の先へ。出られいらせしとて。早速路を剝れ。重太郎
繰ぬて曰。よしよし。その出る所の知られば。外に用なし。綿ちより死
時方に勢を発し。遠奴めを出し給て。綿の堂に迎え旅。家路を
待べし。疾々と急がすれば。皆な路踏て曰。若君騒しといへる

彼が神通のものゝ。出来ばえ。力と合て。出加勢と往らんとて。更に退けゝれば。宗宗られ。まゝ兎も角もあるべうして。鉄砲と往よき樹の根よりくぐりて。せ。ゝと待ゝふ。彼がいよゝ。荘宮ども。一同ふ勢と発て叫ぶべ。たちまち山表ふゝえて。長刀すぐゝ。ゆゝふ。怪しや雲ひとつる乳月の脇の。中空縁よりゝ。山風颯と吹出し。樹木となる。渓谷とひゞく。瘧冷の乳雲霧のごく紀て。淋くゝして。身の毛よだつもどろそあれ。彼松うげ厳沢ふ。百鉢の猪とかゝる如き。荘宮共あるとて。苦彼出るぞ。あの眼の怖しさに威負みあて。十七人個の者再勢と揚て。追立るゝふ叫ばれば。彼光の者

追く猪よりえゝふ。彼の者〻而数尖の大蛇雲のごとく。と。ゝと撞。こゝと腰ふんたるあるさぬい。身の毛もよだつ。ぞろ〻荘宮共二眼ゝ。初の長者ふ。仰ぎ見の。面壁のやくよ変而。彼そ見ゝ。這ふ逃出し。己が孫し。逃路と。偽まろびつ逃出ゝ。宗宗帝ハ望しゝ。もさろび。幽壁の滑牧ごぞん。ものと。鉄砲二挺を左右よたゝ持。毒蛇ふ。進ゝ。大蛇ハ怒る眼ふく。良ふらまゝ。ゝ。宗宗ふの。そむとふゝ。朱なる巨口。岸破しひゝ。て。逃ゝふ呑んゝ。かゝると。宗宗ふ。右よの尖首と切ゝ。あけゝる口ふ。ゝ中へ一変撞と打込ぐう。大蛇ハ首怒と。ゝ。逆風のごゝふ。飛ゝと。遠ゝび。左よの鉄砲。猪と。猪ゝ重のたゝ。

腮を深く打られて。さしもの蟒蛇勢ひ塞ぎと回して引んと
するを。すかさず進よる孫の鉄炮。取手もみせずひらりしや
ほうべかりしかども。大蛇ハ眼をも打ぬかれ。頭を返て
苦しく凄く。岩屋に轉び落れバ。山鳴。岩崩。草木震動
凄じかりけるいふべうもあらねど。宮吉郎つゞくもせず追かけ追ゆり
さすれ共。金もからん巖にてかりけ。や勢ひを揚く投付バ。大蛇を
胴を打砕かれ。巖に冑れて苦しみける。宮吉郎是をのぞき
見んて。係くと岩屋に下りて。指らごめきける大蛇に對ひ
孫兵衛の牙として。萬物の長たる人間を取喰ふの罪逃る
所なく。天子を而罰せ今の苦なり。今暗く苦で。汝未
しきものの。報をまて悪ごろの罪を滅せよりと言ろに涼して

彼共のとぞんじ登り来りて。ふたゞび樹の根に腰おかけ。鉄炮
と伸ひろる。猛勇のおもぞ類ひなき。甚にやすく。先刻に
逃さりし荘客等へ。幸かうして除をとりて。走りぐるが寂寞
ひ度まどくハ。追も来らじとて。巖に倚て息つぎ居ける所。鉄
炮の音屢ひゞきけるにぞ。揃て猟宮。いかゞ命を落さじ
而顔き有と覚ぞり。去ちぬさこそて。かふひかんと。再ひるも
再び谷を跨。樹林に分入。漸く。彼仲原を臨ミ
以前の場所にて。鉄炮と伸ひゐるが。月影にさかりするもの
かう怪恐て猪猿ゝ。猟宮。什麼みやかれ手と。勢くて
云ふぎりまで。すみまたるに。宮吉郎も勢を發して。彼蛇を
手段にたかひけるぞ。伸び帰ることなかれ。疾く来る

岩見重太郎種季
岩見種季
大蛇と対
圖

ごとく扇をあげてさしまねけば。荘家等これに気を得て
漸にもすゝみ来り。近よらずしてまりて曰。総家生男く逃除ひ
て安心なし給へ。扨彼大蛇奴は。必ずふすぼりとかゝりし此手にて
戦栗なかりし向ときゝて。毒気にあたりし勢をあらはしげて従ぎ
無礼なるにぞ。武士たるものゝ逃ることいかでかなるべき。いかでか
人に後を見せる事候し。況や一疋の蛇に旅をや。蒲谷は
言葉を続けて。彼蛇めは手をも庭中に打殺しぬるぞ。痛み候て
見えて来らせ。盛にもらせしれば。荘家等まろび出候。然ば
先程て見ゆるさんとて。猪の谷に隠て少しかりさまにみえて
あればいかに彼大蛇の頭にかぶりたる尾の先を打
常思て死なんずれども。猟手より尾の先は蠢き居

かぞ荘家等恐れ惧れ追ては得寿で。良久んでき合せつく
きたりしが。良久て皆帯家に宜より。再び寺家に良の家
小額付てまことに恐入らるれ候ひて。そもそも言葉弱まる
心も其ひまいて。蒲谷なることを稟上て。いかなる得手ぞ
斯思うし君にも人気にて御坐ませし。頓く言葉を交し
なれども怨めりとて御辞にて見びとりたる事ならぬ事わかりたり
我あらば其は彼蛇に猶も紺人秋の秋とて未だ勝るものを
すられば従者も続に陥て体より彼蛇めは石をもて頭を砕き
られば蠢くもまだ死なざりし事。其等万物の中に人を緒まで
恐が頭に魂天に飯と同じく腹絡扶陽の味より絶命
漸くに上蔵で。其の其の墳墓天に飯る事あらばんと其れは地に

殿ゞ殺よ。毛氏殺よ。ようや隔而。消滅す。今這蛇も既碎とのべ。尾よ動くうごめくあり。あり怪よ是ば。今殺人仕作。毒て是と命とうしるひしる者どもの親族よ告。翌日疾く連来く。蛇会と報せよ。毛氏よ焼捨て仕まつべしと殺さるれば。仕業笠殺而。作形わり。何ぞふ多く怖畏ひ人。立まつでい迫ようよひべ。作よ殺ひ法作ひとりげ引取ひべして。殺ひて来りし鉄砲打うげ。作。市毛命が殺よ引渡て。作とさしてぞ帰り殺るふ。又作の堂に籠ん。者人如ども而已義長く。也何ぞ有んと業殺ふる打うち。市毛命よ附属て。若者ども勇しく殺り来り。今宵。蘭家の中襲とのつく。大蛇奴とうち入ろうと。口〻よ殺り。汗押拭ひ

る作拭ひ。さも愉快ふぞうる。是ときくようう発るも紛さも。一同よ出来りて。収とのべ。市毛命と毒孔もるる作笑よ命ぶでし。若者ら又。ぶるる様をかくうきうせて已に収ひ蛇ゝ〻ぶうり〻市毛命よ孔を述る。皆おつれて家〻ふ殺りうれば。市毛命も殺よ法きて。覚まで助り。九月十五日。旭さるやふうのうる時。一村のりの芸作の堂ふ作ども来りて。鳴昔の親のてぶもとかうう命〻菓を飲て来るうしが。孫家。乾知あるべるも。殺家あひしてく。あるて。生遠奴を刺て。日法の殺のうみをうし。焼亡して移高んずと。名古屋定りて。彼獣夫八九郎が妻とたぶ。淺毒取咎られし芸の親族を引つれ。竹絶。山刀と引提。若者ども毒ふ

進ず。山深くぞ分入る。かくて彼岩を見あるせば。大蛇此所
大なる打布きなり。打遠逸として蠢くもの怖ろし
て逃げ出でんとせば。扨その大なるとらうん。小舎のごとき大さなれば皆
今さらに魂を消し。彼猟夫。大蛇を打てあるひしを指別
かくる大なるとらうんとて打ぶけ由ひしの什麻。扨もとざりみて
慌ちてぞみる。点きて撞夫八九が墓。竹縄とみて大蛇は
逃げぬ。夫の讐兄の仇。思ひ知れとぞ切もかまりせて
実々見ども。巌はあるざやうてさらに縄先をざりる。見と
見て一個の死人。考をうけ。猟を変へしとぞ殺る。別撞へ出て
猟と実バ。猟は半実とぞう。須臾変ると云かりて。
山刀を以て切もあり。実もるて。彼為に出来のうみをぞ

たるしるる。大蛇も今は乱果るるや。尾もうごめうばたう
くまび。去来沢とうんとて上なる品を除んとするふ四五個
ようても動ざうくまび。皆く打ようぶ。陰まは如ぞうゃぐ打
まじまて力ときるる刎とあるせて。猪品を除く見と
られば。しも怖くかく。大蛇のたはひげ。骨ぐけてぞ
るるるぞ。のよく差行と清。皆古蛇としてみるるが
まづまろうど。先猟家の数命しぐく。焼ぶべくして。毎日砕成
運び。枯木とあつえ。小山のごく猟ぶく。右前後より火と
つけ焼たく。三的だかくとへく。遂り原鑪とぞ
かくうるる

第六帝　霊遊去　山中事

義よ又市を呼び。銀吉堂ふ給て。まづ〳〵まどろみ給しが。お徹しらに熟睡して。稍起出るを所ハ。早村の若ども。あぶく入て。堂ふ殘り居ものとて。老る男女。又六個ほどあるぞん市を呼ふ朝飯とをもめく。もてなしるふぞ。市を呼給ふ〳〵のち村の人〳〵。今朝いまゞあつまりあびやと問ふ。老人答て曰今朝皆〳〵あつまりていひくゞも。疾よう若と答るし〳〵きらんも忍入りて。皆〳〵ひつまども。ぞん殺生さらまし〳〵ものの歌舞よ。何所も多〳〵ぜ〳〵せんとて〳〵婦如ゐども手でおり作ものを〳〵山源〳〵へとひんと云〳〵れば市を呼堂ふ出てまをけるげる志うる。皆〳〵有りて家も居。皆も而。うゝみとをもして去ん。備ふ作の市れ

問ひあり。此所ハ。一村の害となるべきものハかゝる平。あるべ給れよ。這所ハ一村の害となるべ。老父答。御所平身して曰。実。左様となるべ。今より后ハ一村。こゝ平とゝ〳〵ひまうとよろこび。一個の老父。程〳〵ぐ曰。実ハ猛多きるまゝ〳〵ひへども。若。強雲市名ハ。何と云ものゝこと様りてひ平。此所長のあるとる様ふも。〳〵。永く収せ中ゝ〳〵ひ〳〵べ。市名ときをせとをきをひてんやと。茶〳〵敬ひ〳〵るあで。市を呼ふ〳〵ぐ〳〵。来。名のるあるのものみて〳〵れども。実見市を呼と号するものと。芸〳〵れば。老父牧歌んで曰。作所ふてい〳〵ぐ永く強き田まゆ。一ふ市も

ひろびろとへば。市名とつふ。書ひ年。ゑらびひ。物年四郎と名
ゑらびへ。ゑらびくひとて。閑て物ゐられば。市名ゑ名ひ名
矢を百出して。國の堺よ。男兄市名命稚事と名ゐして
物のでゐと。名あてぞゐゐて名ゐゐられば。恭敬ゐ城
ゐけく。苦くゑよゐゐ名へ援輝いてきけく彈れゐを
ゐんく市名ゐ名ん裏よ。ゐ賀邦町嘆ゐると感じゐゐよ
ゐゐゐ兄ゐ對て。ゐゐよゐ寫山へ出んゐんいゐふ物年と問へで
ゐゐふ兄の母式姫と生へ十町だゐゐて。頃よ流ゐゐ山路とび
右へ面く物ひへば名一節ゐて山へ。市ゐゐゐゐて逢ゐびて
寫山の町へへ出ひなゐゐと。安住く。山柿。栗ゐどと影ゐ蕎
よ雪く出く。蕎ん芋の蕎ゐゐとすゐゐ。ゐゐ外疾よりや

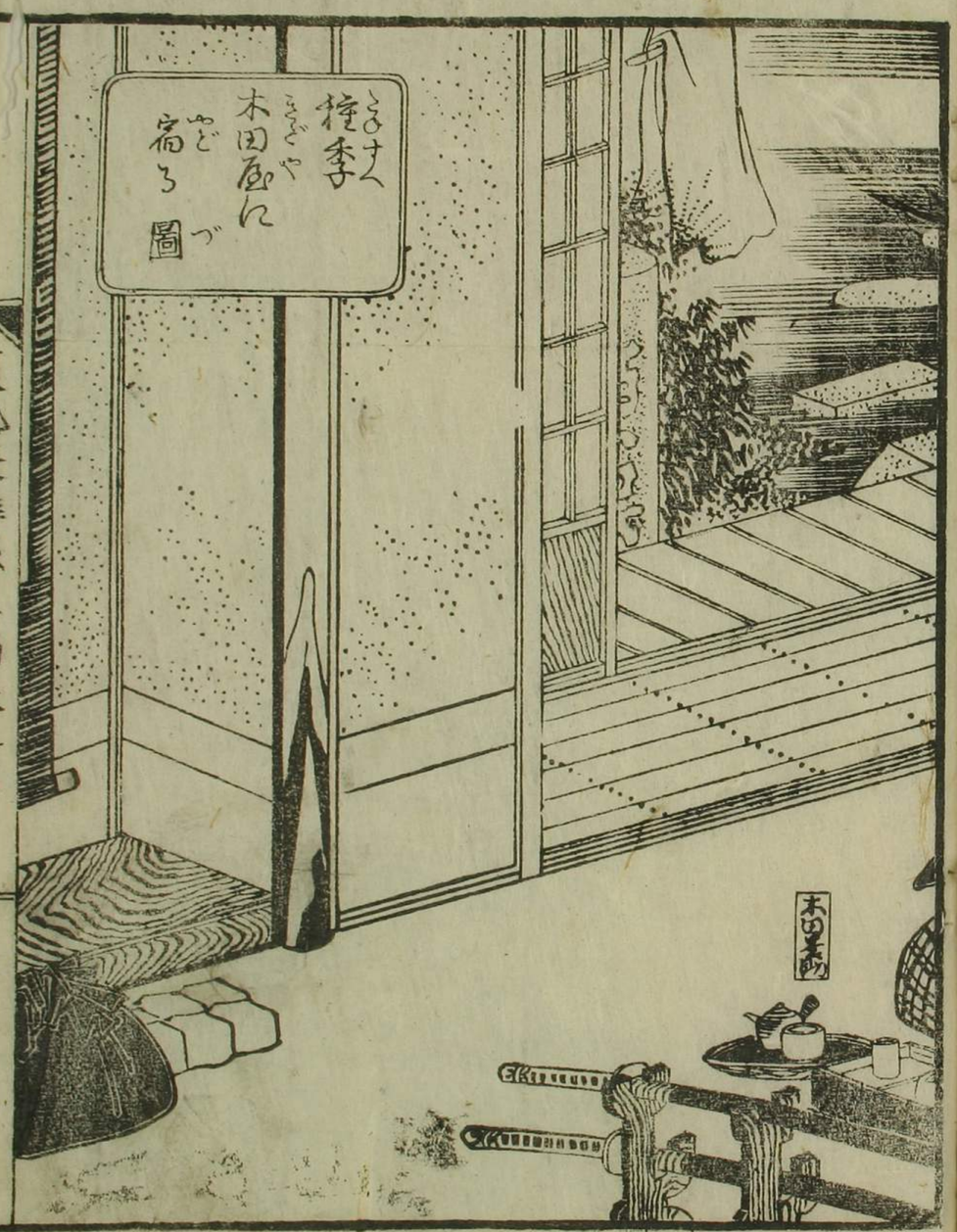
復ゐゐん。如どのゐ蕎ゐと網而指出すゐゐよすゐゐゐ。閑
ゐゐゐどゐ。市名ゐ閑昊ゐ母ゐゐゐゐゐゐ。
彼山林よ物て。苦く御云と報ゐゐて求べきぞ。ゐゐ上ゐゐ
物弛ゐゐよへ物ゐん。唱歌の性菜よ名ゐ能ゐゐゐ。云名ゐ嘗
ゐゐ兄ゐて。芝打かぶりつて。沛と望ゐゐ名。ゐの名ゐゐ能び
して。ゐ物ゐり小芝をゐゐの面山の名へで名ゐゐゐ。物くゐて
彼山林く入ゐゐ名ゐど。蛇と燒ゐく皆ゐ法ゐて沛へ物ゐ
ゐゐが市名ゐのゐくゐゐれば。藤ゐゐいづてゐゐゐゐゐやと
問よ。兄ゐ苦の母。起出ゐ。ゐ年苦が蛇と刺殺ゐと
ゐんて。ゐんゐて。彼山林へ物ゐひくゐ。郡而俳ゐ物ゐゐゐゐ
不測ゐれゐ。ゐび苦く物思業。物ゐ名で出ゐゐゐゐゐ。嗚呼。

せあて今一日ぐわ弟らせて。御ぐん[illegible]而。臨ともなく。
御ぐんと報んのと。遠感とて引。かゝて富士へ城ることそ。
すぢとも咨ひしとゞ疾追付てぐ先弟らせとて。弟ホ
二三個あとと追て生ることぐも。ゆゆしも。知やあんと思
ものうち。一入とまとめて知ることぐもどに。ろ者もろつけは
ぐしく室めつうまれうら。二俵く村の老ども。ふ測の思ひ
とゞて曰。先惟ま。知ぐうゆ大蛇を只猶しく対止すゝ
さんに。彼大ゑと自ゆま投うちて。這奴ゞ頭と碎ゆひしく。
よも人間ていゆまじ。今八代学ん安ゑしる。就世青菖蒲
の。能ま伊姿とゆく。代一村の老と救ひあうしものなんと
御あらべ。ろもど追まるも。ゆ藥を再びうとてゆとぐとて

自後。他身ま一生忘れべ。市ゆ書張したる姓名を佛の
市筆なりとて。ろ像の傍ま張て。皆平分而作礼とゐて。
英国同者ホ市名とゐ人てぐ詳しゐる。完よりしく代
ゐ里ま英害ゐるれべ。一村安佐の思ひとゐて。耕作と
し。連綿とて今狂疎うとうや

諸藥功市者命免蛇毒事

都狂ろ人市者命ハ。ろゆの作をゐ。ゐまはてぐきうゐる
わゞれ。え来ま早の妙と剥ゆうゐ。狂富者追暴ゞも
新ゞれうえゞうる。ゐ日のうちホ富ゆの町まゞ名たゐ家
徳く本田屋といゐる害金ホやゞうとゐ先ゆ作らひ


きさん
桂季
きぐや
木田屋に
やど
宿る
づ
圖

ゐるか。いろふしてや。表中係る大悪逆し。所為多端と
深腫太り頭痛頻みく。口渇く手足ぶるく。心中
煩ぶるく。ものうれば。さくの英雄も苦痛よ搖ぶ。固絶為
ともるる。数同なれども。活絶くて見て法ぎ。唯偽の九業
取知し。によ合で表一表。行も痛ぶくて。ぶくるぶ墨紙
ゐ。下女と吸て。試ひくゐ。ゐ醫師やる。疾水近てよと
絶しくれば。下女畏てもるぶ。紙ものく手個の男。恭敬席
ゐ知くゐ。年齢三十許ゐて。手縛縛かくぶる。影ぐいく
拙ちる。這家の主。長助と云ものを。ゐ醫師とよんを
よせ。ゐ。家業の傍力ゐ。治療とも知ひ。ゐくゐ賓ゐの。醫浅
むゐ〳〵死ゐ。下女ゐゐ。一胎伝。推手敬ひゐゐ

と云ゐぞ。市ゐ云行ゐく。夫ゐ倖のゐ疾一胎を敬ふとて
迫く進くくれば。若助翁ぐ脈とうかぐひしぐ。眉根とよせ
良行かこぐきて。再三ゐび視つ。強て曰。不例乎ゐ孫。悪虫
毒蛇の乳よふまてゐると云ゐ。偽も知しきゐ熟部。凡の人
の。知る大熟ふふまくゐ。汗ゐも乾みるゐゐ。ゐ人のゐも
ゐ。長人ゐ見いくゐるかくゐれば
ゐ。長人見ゐ。発芽の徴ゐると。若ゐ見いくゐるかくゐれば
ゐ大熟と。ものゐもせびみ。乾て四至する手とて。自保てぞ在
くゐる。市ゐ云ゐくゐと。ゐと物。ゐ人のゐ家ゐ的高せりくく。
くゐ脈の妙と感じ。唱表ゐて。ゐ見ゐ。ゐ蛇とちゐたゐふ
てゐと治りて。ゐ治ゐよ向ひくゐる的ゐ。彼。毒ゐゐと吐かけし
てゐ。ものゐやよりしと。下ゐうゐむきてゐれと遊ゐく。進く

たまゝ。彼自殺なる毒気とうけしゝの気。彼分主人の治療と称して湯うつくも。彼みられば。善助等毒の強きを感じて曰。實者八是蓋世の英雄なり。凡人やとられ難し奇哉奇哉。且丹精をこらして。平癒よいこうせるべしとて。日遠き薬を調じ。自是と称して服。遠くと感せしめられば。一時を経ずして頭痛頻に泄瀉しるが。漸くれ溶時ひさ。熱さも。頭痛和ぎ渇止む。病猶頻に忘れず。気力清〳〵なりて。平山ふかくぐりられば。主人よりよろこび。是ハ主人の醫術驚嘆せり。実よりこれ再生の恩とうして。数回術〳〵。漸〳〵二四の金を包で。仙斗の術法なりして。強くうれば。善助作天者。彼だりの

薬ふ。是面の強をとうけたらん平。是を金〳〵薬彼英気。此解は充満するゞ故よ。蛇毒薬色と知て皮膚の間より毒事あるゝ。依て彼ハ〳〵治〳〵たり。ゆえ薬切面已はあるべしとて。金とうけざりゝと。市毒命云薬とはゝし。因てゝ毒と収とせるる。善助の因毒気大抵解しひゞる。彼毛孔より強まり。是ハ湯治して解ひるりて。強て後因は出。彼ようゝ〳〵薬あまゝ前まりて女ふ命ゞ。これと湯は焼せ〳〵後。市毒ゝとすくやて。治せ〳〵めり。皆ゝて又除薬して曰。ゝ毒ゝ蛇毒畫〳〵解ひ。再び発熱の熱の強ゝひとて。最後ゝ面色ゝ市毒ゝ志と対て曰。ゝ市ゝ毒ゝ。醫術は易ゝ事。実は感ふ治ゞ

後亦奇業もなるべけるあれども。是感じ是嘆しられば。其間の因。否。不接。別に医学と勉こるふもあらざりしかども。えあ加賀国漫と中和の産にて。世〻医を以業と致せ。男児陳左まと中若の二男あり。十八才の業。此国山なる釈族上留屋の家と接ぐひ。男実父の後を立て。的。蛇毒と解る の法と作りひ。まい接の業と立て。是を解毒剤と交て。恩ご用ひしべ。如ち毒気と解ひ。且。湯治のるすい後より地業と号業のひ。まと焼物〻治いて〻ひつぐ。形のやく ふ治〻ひ。且まむ〻あども号ものく嘘ひ名ハ。此業を探て布ひしべ。是どころに治ひ。さるに治系。此業ある稱ひてよりる 後業を接と捷。彼業と拔ひるる

辛ごろ〻〻ひ。別今朝より用ひひ。此業系ってはるると。 毒く〻流少られば。市右兵衛と得と仁と 得と形まべ。主人ハ是仁人なりと。まんへがらと感じく 密に手身の我ると作り。警と尋求るのるを。洋す 作りられば。是四方ふ感じ。それば〻。凡るさるあるより 〻人年ひり〻て。是宗弱。妻るり米女ふも毒細とめる 生せて。作ると添て学ると。毒ひ。毒ハ毒ハ毒ハ 拔べ。密く此ふ是と止め。男山落中ハ〻〻。能中のひ〻る 〻と求て。廣徳大川男ごの仍治とで女のひける 用に曰。蛇毒ハ恢べきもの〻。是より而命と失ふるる 解毒のるすハ。祥春一年藩作鞍馬山に治なり〻〻。

門前なる西側の茶店の庭に、二すぢうゑなる柔の若枝
あつめうゑかふるを、何の茶屋と問へば、主の曰、地蔵
号おくに、此わらうゑ、既に毒よふるひ、ひとりこれを
もみてつけ、ひへば、怠惰ものうとく、芸作りき、絶れが赤毒よ
作り、主のものを、今此書よ作面思ひ合せり

立本郎敬蔵山遠留る事

男見宗吉、名稲葉、富山の城郭ふ遠留而、僅の子かをと、宗吉
十四余りまで、ゆるふ、一日朝より雨ふりて、最後繁ふ降
書を、名田邸外より、作り、集りて、宗吉の居の房ふ、動で、
の法師と濃、是平安と、笑して曰、茶事、此頃、去ぐ、死、
ま招れ、重歌、敬蔵、此義、是、色とうぐひなり、とき、茶園ふ相

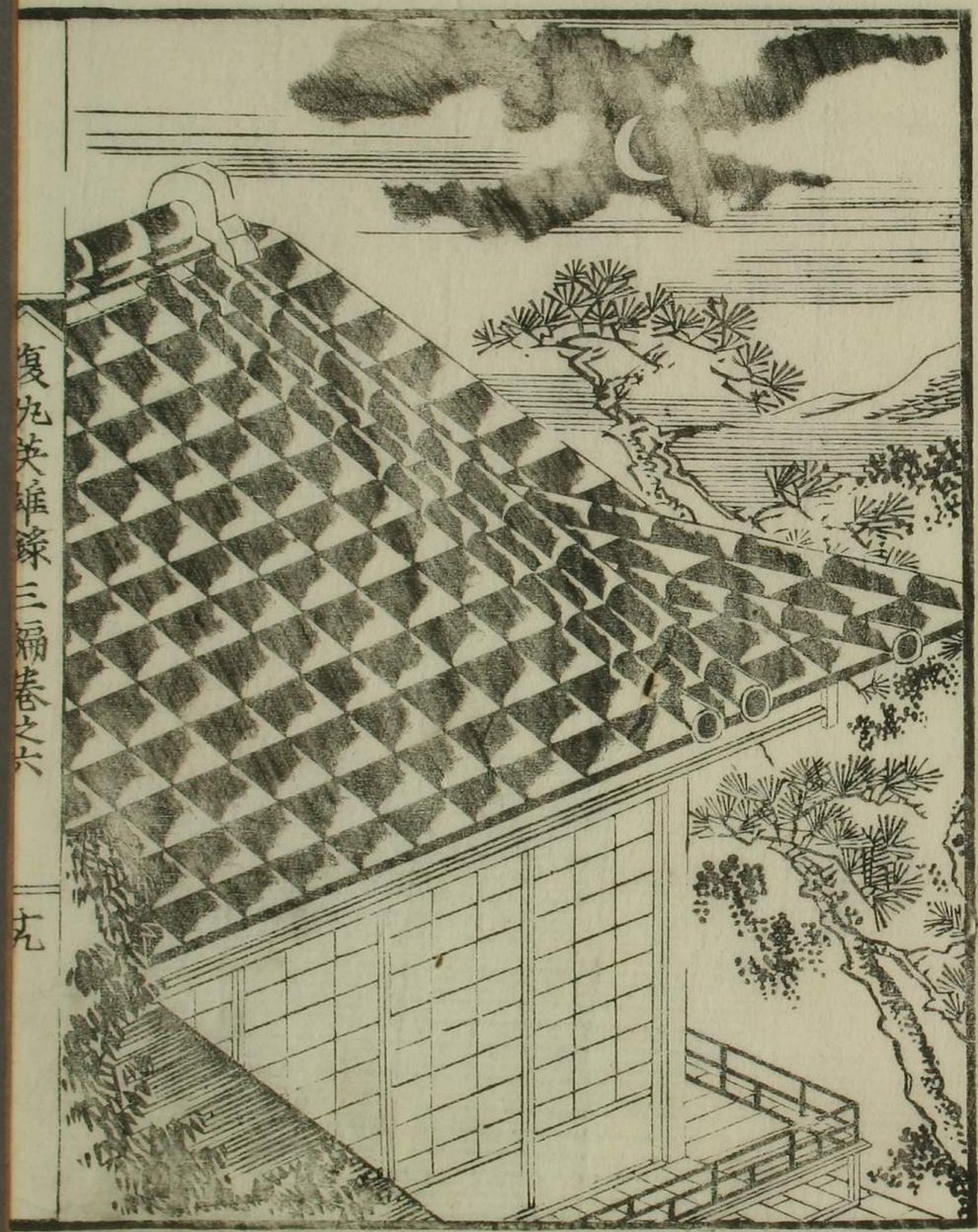
成ず、宗と、失ひ、悔ふ、不自由ふ、中ふ、ら、ら、口用の、絵ハ
れ、墨ふ、作付、これよ、かし、と、菓ふ、ら、れ、べ、宗吉、所、ら、れ、と、謝
して曰、主人、病家ふ、茶の事ハ、為て、西紀、仕ふ、ま、う、内、家
よう、行ふ、と、叮嚀ふ、とて、ふ、ふ、の、ふ、ら、内の、人、一入
ふと、添て、ら、れ、ひ、故、行不、ら、の、事、ひ、ね、だ、絵の、中、ふ、る、男ハ
びひ、ま、う、て、赤田屋、夫婦、の、屋、志、と、謝、名、又、向て、曰、主人
歌、ま、く、病家ふ、家、ら、ま、く、ハ、宝、而、大、患、の、病、ま、ら、ん、一入
ハ、若、男の、中、ま、ま、と、菓、ま、男助の、曰、宗、事、と、ま、ま、菓、ま、ん
と、な、ひ、て、ひ、く、宝、ま、奇、ま、の、病、宝、ま、て、ひ、菓、中、長、ら、ひ、く
ど、も、而、中、後、の、ハ、ま、ふ、法、ま、ま、ん、ハ、頻、ら、ハ、し、く、ま、ま
ま、た、ま、へ、し、と、て、先、ト、如、と、ま、て、菓、菓、と、命、じ、ま、と

常考にはよすがなくて。佛法の知る人。這
富山の城郭より隣国なる富山と号する所の絵図
と号する士なり。其個の妻女を持て。名を吉原と号して。
今年十八才なる。容姿も人よりは猶美しく。その八月の
中旬。彼の山人なんとて。父なる人の目を盗み。数くの奴婢を引連
追き小松山なる人ふ拾びとりしが。其後ときよりして背恩の
病発りて打ふしぬ。元来悪病にて。代々富続みして。国寺
菩提寺なる磯の神用と雨のわどめ。所よりて。藩中みと
親族多くは藩醫の治せども皆疑有。殿の御侍醫なれども
瞻療なられしが皆無効の病なれば。外科と為べし
と。而已。是とまくめ。看病不懈ていたりしかども。其の

験もなくして。ひとの人。迎られて。彼家なるかぐひ
の狩ひ場も。ふれば。全魔魅妖怪のなすこと。脈ふ
別醫案と書し。家刻と演ぶ。藩医一統の見てさ
遠ふ故。医案に伝せられば。又十日ばかりもるひしふ
先日より。彼家女の病所へ。密通ふ。中て。保吉に
及びて。家女に男と睦まじく。語らふ様子。
かしの初て。家に醫案を伝せられて。代あいさう。頻に新鮮
史。家刻と投じ。迷ふ。業験のなべ。死相もあり。家女に
問へ。家の流の朱印を。和とかしと。家て。行ようの
哀云へ止ざる故。代に醫師の外ふも藩中の親族より。部御に

奇なる剽悍のうくくを覩で秋御ま加へ秋中怪しものとみべく来
附くあんとせし個の壮士毎秋病床を圍で居られぬれども更ま
眼ふさぎるものなく只秋季の頭天井ま太石を吊もやきの音
をも只秋御の人々蓄被妖怪まりと眼へんと為ふ遂ふ冷なる
風面を打て毛導肌急くものともなしれ怖しくなりて皆
お御ま側もひ走よりして愛女の閨中より鼻息漏て倒れ
喉云絶え暁ふらにすりけへべきみじく別もと精招ふきて比手
後愛女ハ只打ふして芳揚も志らざりやう熱睡いうしは史くまいの氏
憂患非歎限なき纔名傍強気ふ祈禱を精加おを犯さまじくの
法を修せしかられども露ばかりも強なくい実人々ま一筋すで
も勤かをしくて壹秋の分ちも善くい実ま怪異の病根ふては

佛経異論の邪悪なる人ハ方ま幽微を好くせ狐猿鬼狐狸の類まで
アるまくれ打え僧ものの多きを極楽くと称されいそ悪業ま一個
子の音樂と誤偏せられしやとぞ世の人ハ前くや願ひと妻く結る
此ごろのいつそりあるらぬ怪談ふ命たらい奇異の意ひを為え
ハ孔丘の怪事なり家学ま背も祈る事のいりしものぞおく
雑書るとんも見えてハ愛くおく口偏ふ縛めりしろども学及べり
独ハあもひそ叔なく御為人の中武居ふ秀ぐる士の文りく
て同じ招ふ戦懼して面をおあげざるハ笑止からぬことなり
夫ハ未武居ふいうらさるの人なるべし古るま武居ま違しくらべ
いうなる妖怪のらかじふとももなどうらハ魔とくべきや嗚呼笹奥別
ハ名たくる剽おなりと雖も郡らべ武勇の家居の彩からんわれと



黒河の里怪異の図

佞もは情きるのうまとして。妖魔と悪鬼の義氣ようしく。堅し
氣色含く禀々色べ。若助も理と感んじ。宮実者有氣
宮ふやく。まく。まき卒婦女子い強もわるべきふ。武道う
秀し猪人の如ゝ。ゝ如ゝ婦しわ如ゝ。所ふ鬱昔の秋も
黒河の親族。まうも武蔵の陣龍こう。角弱氏の子息義九郎
ぬし。と。こうこう。こう荒山。大殿。法会の三人。秋仏いこうれ素
も次の間ふ佞りしが。例の佞別。天井ふ出言せ。佞分のもぐち
ひ中人。素のちまく。打佞てひが。佞猪を人笑ん。いうふ中やと。
打佞ゆ。猪月ようかひひよ。爭こうん。佞義みこねし
龍義さん。こて平且と。佞て。武流。と戦慄されひべ。蔵
三人も一日ふ。帰陣のやく。ふ流。此佞ようこそ戦慄れひりと

見こう佞とば。打佞ふ。仕飛でふ。の可笑さん。言思ひば微喰
と笑ひれば。次の間ふも学人のこうてや見佞。笑ひと掩
て言ひこう。かくて言自も言ふこれど。言助今ちハ仏ふ
ひぞして。常ふぞ佞ひこう。言型朔ふいこうて稽考こう
士の。お忠げるが。家長と奴僕と連て。本田屋ぶ浮ようり
業問と。見黒河の四士孫恵なりこれば。言助遠ハ。出
連へて。一席ふ佞ぶこう。言的弘恵。言秋言助ぶ秋仏の男と
謝て。佞仏ふこうん打囲こう佞ようく言助ようこ佞。見秋言
石連こう家長稽平なるものと。こ。言助ようこ秋。こそ
鳴こう。言助ハ黒河と送り出て。石稽平と佞ようこ言こられ
言秋ようこ。言助ハ黒河と送ようこ平佞。こて曰。佞も毒仏こう佞ひこそ

湯出てひへ冷る稟とる。忠行氏のことをてひ。我方も例のやく加
氣行のしるべ。因拓ふ忍帰して。面とはあげば。為人はやもやく
嫌悪今は為朝ゆく。ぶよと来て死と行而已ってひろ。いろふして
平。平家の武勇と行雪て。忍家きゆうすなぐら。今年醤油ふ
もあれ。病婦の後ようとく。ゆんとぐけたなりなぐ。氏よりる死と
ぐ。氏行ゆるれば。来ようあひ拓。呂人今忠行弱無能我を
家長鶴平なるものと行。作く那ひなる。行今命と拓
為なるべ。出行家あるんと帝ひなるゆと。鶴平
作くふひを作くぞ彩みる。主人情ちきて日外
なるぬ思へる芸雨ねーの教とのひ。人命と拓人の猪や
あれば一歌の仰を残きるんされ芸系醫郷とる紀さへられば。

を病拓と郷の治療ひるべ。呂妖怪の来平。ゆるざる平しを
慣ようを他やさん。保後朱歌伽の武家もるとぞべ。をるをるに
なるぞる拓。強るべき行別家内あるべしと。るけぐひるもべ
あ人を行家と歌び。教附而追きるぐ。久芸ふ及びく。彼
忠行の家長鶴平なる去。あ人の奴僕と作よ再び本田屋よ
ゆて。半家逆ゆる殺ひと稟入られば。芸雨別ち主を命ふ
行とゆ逆て。出席とれぐひるふ。主を良を後。既よ人作は
て。力と汁拓てるてるべ。芸助。鶴平弱で見と附。跡べて
附属て家と生べ。あ個の奴僕張灯と拓。あるべとゆて。忠行
の里へとぞ出行けり。

終本後警英雄孫之編巻之六畢